

小説国際プラント・ビジネス戦争（十）

杉田望

灯のない屋敷

街灯がぼおつと光っている。今田はいつもの癖で、一度ブザーを押してから鍵を開けた。誰もいないことはわかつているのだが、そうすると誰かが迎えに出てるような気がするのだ。広い玄関にはくぐもった空気がよどんでいる。熱気を帯びた湿り気が全身を包んだ。

三週間も家を留守にすれば当然である。通いの家政婦が週に二度ほど、掃除や洗濯のために来てはくれるが、なにしろ古く、だだっ広いつくりの屋敷だった。今田は手探りで、玄関のスイッチを押し上げた。灯が無人の玄関先を照らした。

玄関を突き抜け、右手のドアを開くと、二十畳余りの居間がある。かつて家族が集った居間である。が、主人が久し振りで帰宅したというのに、冷たく静まりかえっている。今田はバツゲージを居間に運び込み、一呼吸をおいてソファに身を横たえた。誰も迎えに出ないのは、慣れているとはいってもいかにも惨めな思いだ。今田は改めて孤独を感じた。

綾子はどうしているだろうか

ふと、綾子のあどけない笑顔が脳裏をよぎった。一人っ子の綾子は小学三年になつていた。妻の幸子が実家がある金沢に帰ってから、すでに五年近くの歳月がたつていた。その間、二ヶ月に一度の割り合いで、親子の逢引が続けられてきた。この前、京都で会ったのが、三月の来ごろのことだから、綾子とはもう四ヵ月近く金つていないことになる。

夏休みに入ったら東京で一週間ほど、一緒に暮らす約束をしていた。綾子はドイツニールランドに行くのを楽しみにしている、と歓喜の声をあげた。が、急な出



張が入ったため、綾子との約束は守れなかった。それを伝えると、綾子は悲しげな声をあげて、父親をなじっていた。ただ、綾子のなじり方は、どこか遠慮がちで、無抵抗な抗議のようにも聞こえた。

できれば、来週金沢に出掛けるか

今田はひとりつぶやいた。思い起こしてみれば、幸子の家出は全く唐突なものだった。少し考えたいことがありますので、しばらく実家に帰ります。そうしたためた置き手紙があっただけだった。幸子の性格から考えても、一週間もすればけるつとして帰ってくるのではないか。今田は最初は軽く考えていた。

ところが一週間が過ぎ、半月がたっても帰る素振りをみせないではないか。仕事に忙しかったこともあるが、事態の深刻さに気づくのが遅かったようだ。今田は次第に不安に駆られた。今田が金沢に出掛けたのは、それから二ヶ月余りだった。

「あなたはそういうひとなのだから」

神妙な顔で今田を迎えた幸子はつぶやくようにそういった。それにしてもなぜ家を出たのか、今田にはいままって妻の気持ちが理解できない。模範的な亭主だとはいえないにしても、あまりにも酷い仕打ちではないか。別におもてに女をつくったわけでもない。家庭をかえりみなかったわけでもない。何か不満で、突飛な行動に走ったのか、自分に原因があるとは考えられなかった。

さりとて、幸子の方にしても別段、恋人ができたということでもなさそうだった。誰が考えても、夫婦が別べつに暮らす理由はなかった。二人の間に亀裂が入った明確な理由があるのだったら、それを修復する手立ても考えられる。困ったことに原因らしきものが、今田には思い当たらないのである。なぜ、家を出たのか、今田はしつように問いつめた。それはあなたのせいではなく、私自身の生き方の問題だと、幸子は答えた。答えにはなっていない。人間の深層心理は、複雑で理解を超えるものがある。

幸子の実家は旅館を営する金沢ではちょっとした素封家そほうかのひとつに数えられていた。幸子はそのひとり娘だった。だから会社を辞めて、今田が幸子の実家の家業を継ぐことを、彼女の両親は希望していた。それは今田にとっては、受け入れ難いことである。それも遠因のひとつだろうか、今田は考えることがある。

唯一、思い当ることといえば今田の母圭子との折り合いだった。嫁と姑との関

係は古くて新しい問題のひとつでもあるが、今田家の場合も微妙だった。父とは馬が合うようだったが、姑との同居生活が相当にこたえたのか。が、二人の間に目立ったいさかいがあったわけではない。だから幸子が家を出たのは、そんなことが原因ではなさそうだった。

今田の父、勝義は国立大学の教授を永く務めていた。性格がおとなしく、物静かな人物だった。退官するとまもなく、心臓病であつさりといった。母も父を追うようにして、その一年後に死んだ。今田自身も一人っ子だったから、これといった縁者はなかった。二度続いた葬儀は、大学の関係者が手際よく、形通りに儀式として進行させた。さすがの幸子も葬儀のときだけは帰ってきた。とくに母が死んだときはかいがいしく働き、嫁としての務めを果たした母の葬式が終わって一週間目の夜。親子三人は同じ寝室に寝た。ほぼ、二年ぶりのことである。綾子はそのことがよほど嬉しかったとみえて、なかなか寝つかなかった。葬儀の間も幸子とはほとんど言葉を交わさなかったが、今田は深夜そつと手を伸ばしてみた。もしかして、という期待があったからだ。幸子は軽くその手を払いのけた。

「そんなつもりはありません」

幸子はそういうと、背中をみせてすすり泣いた。その翌日、幸子は綾子をつれてそそくさと、金沢に帰った。母が亡くなった上に、娘と妻が去った。それでなくとも広い屋敷が、一層静まりかえり、寂しさを増幅させた。今田を救ったのは不幸にも仕事の忙しさだった。それにしてもなぜなのか。事実上の離婚が成立しているというのに、幸子は法律上の処理には強く反対している。だから東京と金沢で別べつに生活を続けながらも幸子とは法律上は立派な夫婦だった。

自分は実家に帰りながら、そのくせ離婚に反対するのは、たぶん世間体とかを気にしてのことか。それに綾子が成人するまでは、戸籍をきれいにしておきたいともいった。もつとも幸子は、あなたに好きな女性ができて、再婚を考えているのだったら別だが、ともいってはいた。

身勝手の理屈である。最初は怒り狂ったが、時間がたつにつれ、怒りもいつしか鎮静し、気がついてみたときには、現実を受け入れていた。争う気力もうせていた。不思議なことだが、別べつの生活もいつの間にか、それが自然なものとなっていた。

電話が鳴った。誰からの電話か。今田は枚われたような気分になって、受話器

を取り上げた。電話の声は、意外にも鋼管輸出部の加納元子だった。もちろん元子が直接今田の自宅に電話を掛けてきたのは初めてのことである。今にも泣き出さんばかりの切羽つまった声だった。何事が起こったのか。一瞬、不吉な予感が今田の脳裏をかすめた。いくらか落ち着きを取り戻してから元子はいった。

「お帰りになつていたのでですね、ああ、よかった。実は……木内課長がお亡くなりになりました……それで電話を差しあげたのですが」

なにを血迷っているのか。あり得ないことを口にはしている。なにかの間違いだろう。元子の声はくぐもつて、聞きにくい。今田はとっさの判断がつかずに、もう一度聞きかえした。元子は落ち着きを取り戻したようだ。

「木内課長が一昨日、脳内出血で亡くなりました」

加納元子は乾いた声で、明瞭にいった。今田は受話器を握ったまま、茫然と立ち尽くした。まさか、と叫んだ。声にならない叫びだった。事態を理解するのにかなりの時間を要したようにも思える。事態を呑み込んだとき、今田は心臓をじかに打たれたような衝撃を受けた。

「それは本当か」

「はい……！」

「で、どういうことになっている」

「今、お通夜をしています」

時計を見ると、八時を少しまわったところだった。家族のことで、感傷的な気分にはひたっていた今田はいつぱんに現実に引き戻された。なにを差しおいても、通夜には出席しなければ、と今田は思った。

「お通夜は自宅だね？」

「はい。みなさん特っておられます。それでは後ほど」

元子の電話は、そこで切れた。今田はもどかしげに、喪服に着替えると、急いで表に飛び出した。国電・吉祥寺駅に近い井ノ頭通りで、タクシーを拾った。今田は行き先を告げ、ともかく急いでくれ、と運転手にいった。タクシーは烏山からすやまの交差点で首都高速に乗り、最初は順調に走った。だが、新宿を過ぎたあたりで車は渋滞を始めた。

今田は焦った。運転手に怒声を浴びせたが、運転手は冷たく無視した。江戸橋あたりで、再びひどい渋滞が続いた。スムーズに流れ始めたのは、錦糸町を過ぎ

たあたりからだった。高速道路を照らしだす街灯が細い線のように延々と速らなっている。下弦の月が、思惑ありげに雲の間に見え隠れしていた。

メキシコで別れたときには、あんなに元気だったのに……木内が死んだなんて、とても今田には信じられなかった。木内の笑顔が雲間に浮かんでは消え、あの特徴のある笑い声が聞こえてくるようである。タクシーは津田沼インターで、高速をおりた。

住所録から写しとったメモだと木内の自宅は、津田沼インターを左に折れ、そこから鎌ヶ谷方向に二十分ほど走った八千代台という新興住宅街にあった。

このあたりはかつては陸軍の演習場だったが、大規模な住宅団地が相次いで建設され、一大ベッドタウンに成長していた。だからこのあたりに住む人びとのほとんどは、一時間余の時間をかけ都心に通っている。

農道にアスファルトをかけたような曲がりくねった細い道を、どのくらい走ったか。そう長い距離ではない。が、今田にはとてつもなく、長い時間だったように思えた。やがて新京成線の駅が見えてきた。運転手は、このあたりは不案内だという。ちょうど、駅前に交番があった。今田はタクシーを停車させ、目的の住所を示しながら、道順を聞いた。

何人もの通夜の客が訪れたのであろうか。交番の警官は、手際よく道順を説明した。思ったよりは、簡単にみつかった。町内会の天幕を張り出したところが、木内の自宅だった。今田はその少し手前で、タクシーを降りた。家の前には数台のハイヤーが停車していた。

玄関先にセットされた受付では、関西商事の数人の女性たちが立ち働いていた。そのなかに元子の姿があった。視線が合うと、元子は軽く会釈した。

今田はかまわず、家のなかに入った。玄関は客の履物でこったがえしていた。今田は案内も請わずにつかつかと、家の奥にはいった。庭に面した十二畳ほどの座敷に仏壇がしつらえてあった。

思ったよりは客の姿は少なかった。仏壇の中央で木内がほえみかけている。いい写真だと思った。今田は仏壇に向かって焼香を済ませた。たぶん、親戚の男だろう。今田に向かっていった。

「一応、変死という扱いになったそうで、昨晚、司法解剖を受けたそうです。自宅に帰られたのは、今日の午後だったとのことですよ」

「変死ですって……」

今田が思わず大きな声で聞きかえした。が、男はそれには直接答えずに応接間に案内した。応接間が控室として使われていた。幾人か同僚の顔がみえた。それぞれが無言で挨拶を交わした。近所の奥さんたちが、客たちの接待にあたっていた。鋼管輸出部の青木部長と親戚の人たちがひそひそと打ち合わせをしていた。応接間の奥の端に大園の姿があった。大園は足を組み冷酒を口に運んでいる。終始無言だった。目が真赤だった。手許がわずかにふるえているようにもみえた。今田の姿を認めると、軽く頷き、

「今日、帰ったのか。ご苦労さんだった」

と、短くいった。しばらくして木内の妻の早知子が姿をみせた。早知子は意外にも陽気に立ちふるまっていた。悲しみを押し殺すためにそうしているのであるうと思った。大勢の客が訪れたことが、よほど嬉しいことなのか、陽一とかいった木内の幼い長男は、客たちのあいだをはしやぎまわっていた。それがまた、通夜の客の涙を誘った。

早知子は今田の姿を認めると、近づいて挨拶をした。木内にとって今田は数少ない親友の一人である。それに木内夫婦とは学生時代から長いつき合いである。さすがに今田の顔を見ると、早知子は目から涙をあふれさせた。今田はどう言葉をかけるべきかわからなかった。

「とんだことでした。最後はどんな状態だったんでしょう」

「脳血栓だそうですが……」

早知子は声をひそめるようにしていった。話では、変死であったと聞いた。それにしても早知子の答え方は曖昧だった。それ以上、根ほり葉ほり聞くのも悪いような気がした。何かあったかはいずれわかることだ。そこで短いやりとりは終わった。

いつのまにか、大園の姿が消えていた。同僚たちも腰をあげしめた。残っているのは親戚の人たちと、鋼管輸出部の関係者だけだった。告別式の打ち合わせか、相変わらずひそひそ声で、会話が續いていた。それすら今田にはどうでもよいことのように思えた。

待っていても仕方があるまい。何か力になれるようなことがあればと、今田は儀礼のないいまわしで、早知子に挨拶を済ませると、玄関をでた。すでに天幕の

受付は片づけられていた。人影はない。

虫の鳴き声が耳にうるさくまとわりついた。外気は冷んやりとしていた。住宅街は静まりかえっていた。夜空は高く晴れあがり、夜風に乗って秋の臭いが漂ってきているような気がした。

「今田課長さん……」

短く呼ぶ女性の声がした。振り返ると、元子の姿が街灯に揺れていた。急ぎ足で追いかけてきたのだろう。まにあつてよかった、と元子はいった。元子は肩で息をしながら、今田と並んで歩きだした。月の明りが二人の影を、大地に映し出している。方角を定めたわけではないが、十分ほども歩いたか。住宅街から国道に出るとタクシーが流れていた。

「どうした皆は……」

「親戚の方と鋼管輸出部の方たちが、残っておられました」

「そう。で、君はどっちの方角かね」

「阿佐ヶ谷の近くです」

「それじゃ、同じ方角のようだ、送っていこう」

今田は大きく手を振って、タクシーを止めた。まず、元子を先に乗せた。タクシーは二人を乗せ勢いよく走りだした。こういった道順で走ったのか、よく覚えてはいない。武石インターと表示されているところで、車は高速に乗った。さすがに上り車線はすいていた。時刻はすでに十一時を少しまわったところだった。元子が突然鳴咽おえっした。激しい鳴咽である。今田の胸にしっかりと、顔をうずめて激しく泣いた。小さな体をふるわせて、泣いている。この娘がなぜ、木内のために泣くのか。今田は驚きと、困惑を覚えた。

いつもは快活で、よく笑う女性だった。長く柔らかな髪が今田のほほに触れた。まだ、未成熟な乙女の香りを残していた。泣きたいだけ泣かせようと、思った。そっと、肩を抱き、髪を愛撫した。栗色のしなやかな髪だった。俺の死をこうして泣いてくれる人間が果しているだろうか、と考えたりもした。

「どうしたんだ……」

今田はほとんど意味のないことを口にした。対向車のライトが元子の横顔を浮かび上がらせた。感情のたかぶりが、次第におさまってきたようだ。今田からすうっと離れて身じろぎをした。少し考え込むような表情をつくってからいった。

それはまだどう切り出したらよいかているようにもみえた。

「ごめんなさい、だつてあまりにもむごい死に方ですもの」

「むごい死に方だつた……って」

今田は叫ぶようにいった。自殺か、あるいは他殺か。今田の想像力はかつてに膨らんでいった。早知子のあの曖昧なもののいい方も気になった。隠された何かがあるのか。

そういえば、通夜の席がいやに重く沈んでいた。そのことも気になった。こういう場合、悪い方に考えが傾くものである。何かあったのか。例の大男のアメリカ人の顔が、一瞬、脳裏をよこぎった。真相を知りたい。元子は、まだ感情が激しく起伏しているようだ。時どき、しやくり声をあげ、体をふるわせていた。だいたい時間がたった。タクシーはすでに市川のインターを走っていた。

やがて落着きを取り戻した元子は、意を決したように彼女が見聞きした木内が死に至るまでの経過をかいつまんで話し始めた。涙はすでに乾いていた。話の内容は確かに大の男の今田でさえ、やめてくれ、と叫びたくなるような悲しく、無残なものだった。

「メキシコ出張から帰られてから木内課長は体調を崩していたようです」

と、元子はいった。それは精一杯、感情を押し殺した話し方だったが、時どき言葉をつまらせた。無理もない、と今田は思った。今田は途中で話をやめさせようとしたが、元子は大丈夫です、といって続けた。

体調がすぐれないのは、時差ぼけのせいだと、本人は笑っていたという。それでも仕事はてきばきと片づけていた。とくにメキシコから帰ってから激務が続いたようだ。

異変が起こったのは、つい先日の木曜日のことである。いつもは早朝出勤を心掛けているはずの木内の姿がみえなかった。朝出社してみると、木内の席が、ぼつんとあいていたのが、たまらなく寂しく感じた、と、元子はいった。どういったらよいのかわからないが、元子は不安になってきた。

その日の午後は、鉄鋼事業本部の部課長会議が予定されていた。木内も報告者のひとりとして出席することになっていた。昼をすぎても連絡がない。木内は連絡もせずに欠勤したということになる。珍しいことだった。

課長代理の武藤が、木内のマンションはもとより千葉の自宅にも連絡をとって

みたが、細君の早知子は心当りがないと、心細そうにいていた。が、さして心配しているようでもなかったという。それにしても木内が無断欠勤をするなんて考えられない。部長の青木はわけ知り顔で、

「騒ぐことはない。明日になれば元氣に出て来るさ」

と意味ありげにいった。そういうことだろうと、皆は合点した。ところが翌日も木内は会社に姿をみせなかった。蒸発ではないですか、と悪い冗談を飛ばすものもいたが、日頃の木内の行動から判断して、そんなことはありえないことだ。冗談は冗談でなくなった。

「ともかく、何かがあってからでは遅い」

課員の成田は木内課長のマンションは、自宅のそばですから様子をみてきます、といって、その日の夕刻マンションに立ち寄ることにした。家族と離れ、マンションでひとり住まいをしていることは、課員の誰もが知っていることだった。もしや病気で臥^{ふせ}っているのではないか。元子は手土産を抱えて、成田と一緒に木内のマンションに行くことにした。

チャイムを押したが、返事がない。が、テレビの音がドア越しに聞こえた。胸騒ぎがした。木内の異変に気がついたのは成田だった。鍵がない。管理人にマスターキーを借りて、ドアをあけた。

ドアを開けたとき、夕刻六時のニュースが終わり、ちょうど、テレビの画面はコメディアンのお笑い番組を映し出していた。テレビのはきだす笑い声が、むなくしく部屋のなかに響きわたった。木内はコーヒーカーップを片手に持ち、真白なワイシャツにネクタイを締めたままの姿で、テーブルの上におおいかぶさるようにして死んでいた。

部屋のなかには死臭がただよっていた。すでに死後硬直していたのだ。テーブルの上には、手帳が広げてあった。たぶん、その日のスケジュールを確認するために、広げたものであろう。ただ、もがき苦しんだ形跡はなかった。一瞬のうちにことくれたのだろう。それがせめてもの救いです、と元子は乾いた表情でいった。

今田は息をつめて元子の話に聞きいていた。タクシーはクーラーが効き過ぎている。背筋が寒くなってきた。それはクーラーのせいだけではなさそうだ。それにしても、元子は気丈に話を続けている。運転手が時どき、振り返っては二人

の話に聞き耳を立てていた。運転手は不釣り合いな男女のやりとりを、何か勘違いをして聞いているようだ。

素人目にもどうみても異常な死に方である。成田は救急車を呼ぶよりは、警察に連絡すべきだと判断した。十分もしないうちにパトカーがかけつけ、続いて鑑識班があわただしく、現状の確保にあたった。警察はいずれにしても、異常死と判断したことは間違いない。コーヒークップはもとより、ベッド、浴室までくまなく調べられた。

成田が警察の調べに立ち合っているあいだ、元子はとりあえず千葉の自宅に連絡した。木内の妻は最初は、冗談でしょう、と笑い声を立てていたが、事態を呑み込んだ瞬間、あわれにも半狂乱の状態になった。そういったときの元子の表情はどこか冷淡にみえた。

その場で、すぐさま部長専用の番号をまわした。幸い青木部長は会社に残っていた。青木部長にことの次第を伝えた。「そんな馬鹿な」と驚きの声を上げたが、青木部長はさすが冷静に、次つぎと指示を出した。そして間もなく、彼自身が姿をみせた。鑑識班に同行した検死官は現場の状況から判断して、

「たぶん、これは病死だろうとは思うが、一応、司法解剖の必要がありますので、ご遺体はお預りします」

といった。そして、発見が早ければ、あるいは助かったかもしれないともいっていたという。

「ともかく、そのときは無我夢中でした」

そこで元子の話は終わった。そして、小さく肩をふるわせた。特別な感情はわいてはこなかったが、今田は深くため息をついた。タクシーはすでに霞が関を抜け新宿方向に向かって走っていた。まもなく西新宿インターにかかる。タクシーは新宿西口で高速をでた。車内には重く、陰惨な沈黙が続いた。今田はとても家に帰る気分ではなくなっていた。

「今夜は家には帰りたくない。そこらのホテルに泊まる」

今田はひとりごとのようにいった。タクシーを新宿のホテル・ハイアットの玄関に停車させたとき、

「少しの間、ご一緒させて頂けませんか、ご迷惑でしょうか」

今田の気持ちを察してか、元子は遠慮がちに小さい声でいった。

「それじゃ、ホテルのバーで軽く飲むことにしよう」

喪服姿の若い女性とこれも喪服を着た中年の男が、バーのカウンターに肩を並べて座った。二人はほとんど言葉も交わすことなく、ただ黙々と水割を呑んでいる。二人は異様に沈んでいた。

ときおり今田のほほを涙がぬらした。元子の衿もとの真珠のネックレスが純白な光沢を放っている。元子が目元をピンクに染めあげているのは酒のせいというよりは、たぶん涙のためであろう。今田は無言で立ち上がった。元子は自然な形で今田に従った。二人は寄り添うようにして、そこをでた。

「抱いて……」

元子は喪服を肩から滑らせた。白い肌が、月明りの逆光に浮かんだ。今田はすでに自制心を失っていた。唇を激しく重ねた。元子はベッドに崩れ落ちた。今田には、元子の若い肉体を觀賞するゆとりはなかった。

ベッドの上に白い裸体が踊った。想像していたよりは豊満な肉体だった。腰の窪みから下腹部にかけて、ふつくらと盛り上りをみせている。元子はしっかりと目をつぶって、全身を今田の愛撫にまかせた。今田が微妙なところに触れるたびに低く声をあげた。

相手を奮めること^{たか}で自らを奮めよ、という成熟した性の術をまだ知らないようだった。激しい愛撫に懸命に耐えているようでもある。それでも、淡く押し寄せる甘美な喜びをしっかりと受け止めようとして必死にもがいた。それがとても可憐で美しかった。

あつ、と声をあげ、緊張を解いた。元子は逃げるような姿勢で今田を迎えた。今田の欲望は激しさを増した。元子を懸命に追い続けた。真っ白なシーツの上で元子の裸体はときに激しく、ときに沈黙するかのようなうねりをみせた。固く結びついた二人の肉体は紋様を描きながらひとしきり激しく身悶えすると、闇夜の静肅さを取り戻した。二人は無言だった。

今田は元子となぜそういうことになったのかを、深く考えないことにした。それよりも元子とのこの現実を、とてもいとおしく感じていた。元子も同じ思いのようである。いつのまにかカーテンのあいまから朝焼けがわずかに漏れていた。

小説国際プラント・ビジネス戦争（十一）

杉田望

机上の大構想

小川と「呑気」で飲んでから、だいぶ時間がたっていた。その間、山元は小川が滞在している赤坂プリンスに何度か、電話を入れてみたのだが、あいにくどこかに出掛けていて、さっぱり連絡がつかなかった。あつというまに一ヶ月近くが過ぎてしまった。この一ヶ月の間、メキシコの情勢は大きな変化をみせていた。最大の衝撃はデフォルトを宣言したことである。なんとか、小川に連絡をとりたい。いったいどうしているのか。山元は苛立ちに近いものを覚えていた。その日の夕刻、小川の方から電話が入った。



「どうしていた？ ちょっと相談したいことがあったもので、会いたいと思っていたんだが、さっぱり連絡がとれなくて困っていた」

「そうだったか、すまんことをした。それで、今日は大丈夫か」

二人が会う場所はやはり、高田馬場の「呑気」にすることに決めた。日本橋から地下鉄東西線に乗れば、二十分足らずの距離だ。時刻はちょうど午後六時を少しまわったところだが、ゆっくり出たとしても約束の時間、六時半までにゆうに間に合うはずだ。

「山元さん、馬鹿に上機嫌ですね。デートですか」

電話でのやり取りをそばで聞いていた前原知子が、軽口をたたいた。知子は以前から山元の仕事を時どき手伝ってくれたりしていた。今はメキシコ・プロジェクトが動き出したのにもなって、山元のプロジェクトチームに配属されていた。女子大を出て、この研究所に入所して二年目にあたる。山元にとっては有能な助手でもあった。

「こりゃ、大人をからかうものではない」

そういい残すと、山元は勢いよくドアを締め、部屋を飛び出した。八月末とはいつても、残暑は厳しい。ただ、夕日は長く影を曳き、初秋の風景があるようにも思えた。地下鉄の階段を降りる山元の足取りは自然に弾^はんでいた。ちょうど、ラッシュの時間帯で地下鉄は酷^{ひど}い混雑だった。

「香気」の玄関先は打水で清められ、この店の客に対する隠れた気配りがにじみ出ているようだ。

まだ、客の姿はなかった。カウンターのなかで、キヨが立ち働いているだけだった。

「あら、珍しく早いじゃありませんか。今日はおひとり」

「うん、小川と待ち合わせをしているんだが、まだのようだね」

「それでは奥の座敷にしますか」

「悪いけど、そうさせてもらうとありがたい。まず、ビールを頂こうか」

床の間に山百合が活けてあった。冷房がよくきいて、ひんやりしている。キヨが肴の用意をしている間、山元は手酌でビールをあおった。それから十分ほどして小川が現れた。額に汗がにじんでいた。

「道路が混んでいて、遅れてしまった」

小川はそういうと、山元の前に胡坐^{あぐら}を組んで座り込んだ。小川の表情はどこか疲れてみえた。だが、服装だけは相変わらずのダンディぶりだった。そのとき座敷にキヨが姿をみせた。カウンターの方から、愛想よく客を迎える仲居の声が聞こえてきた。新しく雇い入れたのか。確か、このあいだはいなかった。

「そうなんです。なかなかいいひとなので、喜んでいるんですよ」

カウンターのほうが、だいぶ賑やかになってきた。「またあとで」というと、キヨは席を立った。いつものことである。山元はネクタイを緩めビールをあおりながらいった。

「デフォルト宣言を出すなど、メキシコはえらいたいへんな状態になっているよだね。ずいぶん乱暴だ。あんなことをやったら、完全に国際的孤立に追い込まれてしまうだけだと、思うんだが」

「うん、情勢の読み方がだいぶ難しくなってきたことは確かだが、あのことを失敗だったとは思っていない。第一、アメリカにしても報復措置がとれないで困っているのが実情だ」

考えていたよりは、小川の態度は楽天的だった。

「そうはいつても、貿易信用は停止されているし、新規の借款の取り入れはこれで絶望的となった。あんな状態では、経済再建も不可能になるんじゃないか」

「そのことは後でゆっくり議論がしたい。それよりなにか相談したいことがあるといっていたね。まず、それから話を聞こうじゃないか」

「うん。このまえ、君にあったすぐ後だったが、うちの児島所長が僕にメキシコのことを調べてくれないかといってきたね。彼はえらくメキシコにご執心のようなんだ。それで研究所の内部にプロジェクトチームが組織され、そのリーダーになったというわけだ」

すでにメキシコ・プロジェクトチームは実質的に動き出していた。プロジェクトチームはエネルギーの活用を通じたメキシコ経済の再建計画を練っていた。当然のことだが、デフォルトという新たな事態が発生したため、調査内容と手順を大幅に変えざるを得なくなった。

児島所長も毎日、プロジェクトチームの部屋を覗きにきては、あれこれ議論に加わっていた。エネルギーを中心にした経済再建計画を考えるにしても、いずれにせよデフォルトという異常事態が、どのような形で決着するか、見極めておかねければならない。山元はそのことをぜひ、小川と議論してみたいと思っていた。

「ほほう。児島所長がね。それで関心の向きはどのあたりに……？」

「ずばりいつて、エネルギーだ。メキシコ政府が計画していることを、彼はある程度は知っている。それにこのことは経済界にもすでに情報がながれている」

「さすがは日東経済研究所だ。えらく情報が早いではないか。で、そのプロジェクトチームというやつは、いったいなにをやるうとしているのか。それからもうひとつ、その情報のソースのことだがね。どのあたりから出ていると考えればいいんだろうか……」

「確証はないんだが、たぶん日経連あたりの情報だと思うんだ。児島所長は日経連の鎌谷会長から聞いたといっていたが、ただ、所長はちょうど、ロンドン出張から帰った直後、俺を呼び出し、この話をしたところを見ると、イギリスの戦略研究所あたりの線も考えられなくもないんだが……どうもそのあたりは掴^{つか}んでいない」

「鎌谷会長か、それは考えられる線だなあ。二ヶ月ほど前のことだが、実をいう

と僕自身、このプロジェクトのことで鎌谷会長にあって。もしかしたらそれかもしれないなあ」

「この話が世間に広がると、まずいことにでもなるのか、この前はそういつていたね」

「いや、そうではない。すでに計画は動き出しているのだし、いずれ世間に知られるようになるのは仕方がないことだ。気にする必要はない。むしろこうした情報というやつは、噂として駆け巡った方が信憑性が出て来るからおもしろい。ただ、おたくの児島所長がこの問題にどのような関心を持っているのか、そこところ実をいうと気になる」

「噂が駆け巡った方がおもしろいだと、それはどういう意味だ」

この前は確か、小川はこのことがアメリカに知られるとまずいといっていたはずだ。こういう問題の場合、ある種の情報操作を必要とすることはわかるが、なにも俺に対してまでも……。山元は不愉快な気分になった。

「ああ、余計なことをいったようだ。すこし事情がかわったものでね」

「そうすると、当然、メキシコが天然ガスの存在を確認していることをアメリカにも知られることになる。いまの話だと、それでもかまわないということかね。事情が変わったという、メキシコ政府はこれを公式に発表でもするのか」

「いや、そうではない。もちろん、天然ガスの存在はメキシコにとって、新たな借款を募るときなど、これが最後の切り札になるからね。だから最後の切り札は残しておきたい。ただ、情報というものはね、隠しておいた方が拡散するもので、その方が信憑性を増す。それも計算に入っている」

「という……」

「うん、というのは、今度のデフォルトに対して、各国政府、各金融機関がどのような反応を示すか見定めておきたいからだ。つまり、我われが信頼できるパートナーは誰であるのか、それをこういう場面だからこそ確認しておきたいのだ。正直いえばそれが本音だ」

小川は皮肉な笑いを口許に浮かべながらいった。どこか疲れ切った表情だ。目の縁が黒ずみ、いつもの生彩はなかった。たぶん、例のデフォルト問題が起こったために多忙を極めていたのだろう。

「それより本題に戻ろう。おたくの児島所長の関心がどのあたりにあるのか、そ

「こが知りたいね」

「うん。最近、イスラムの過激グループの動きが活発となっているね。それで中東は再び激変するのではないか、そうした不安を彼は抱いているようで、だからエネルギー供給ソース多元化のひとつとしてメキシコ原油を確保しておきたいというのが、彼の狙いだと思う」

「なるほどね。なかなか着眼は鋭いと思うよ。彼らの行動はルールなき戦争を仕掛けていようなもので、事態は予想しがたい。その意味では、中東情勢を分析する視点というか、その手法は定性的な分析に頼っているようでは駄目だということだろうね」

テロリズムの指向を一段と強めているイスラム過激グループの動きは、気になる情報として、専門家の間であれこれ議論されていた。ただ、イラン・イラク戦争が最悪の事態を迎え、相互に油田攻撃をしたときでさえ、石油価格は安定していただけでなく、逆に価格低下の傾向をみせていた。だから過激グループのちょっとした過激な行動など、さして深刻に考えるようなことではない。それが専門家たちの見方だった。

小川はなにか思い当たるところがあるらしく、少し考え込んでいた。中東に事件が発生、それを契機にエネルギー情勢が激変するとすれば、中東を除く資源保有国にとっては、石油を高く売れるまたとない機会となる。小川はそのことを考えているのだろうか。そうだとしてみやはりこの場合、米墨関係がどのような展開をみせるのか、山元には気になった。

「ところで話は変わるけど、今度の問題に対してアメリカは今後どのような行動を起こすかだ。しかし、アメリカはメキシコの次の出方を辛抱強く待っていると思えるのだが」

「ただ、彼らは周辺諸国や途上国にこの影響が拡散することを懸念しているようで、できるだけメキシコ一国に影響を封じ込めておくべく、関係国に懸命の外交攻勢をかけている」

その意味で、小川がいうようにアメリカの動きはメキシコ封じ込め、その一点に絞られているとあってよかった。ただ、財務長官がメキシコ非難声明を発表した以外、アメリカは完全にメキシコを黙殺する態度をとっていた。おかしいものでその沈黙がかえって、両国間に秘密交渉でも進んでいるのではないか、という

疑心暗鬼をうんでいた。

「だが、実際には米墨両国は秘密裏に交渉しているのではないか。今日のワシントン・ポストだったか、そうした憶測記事が出ていたね。メキシコのデフォルト、これが長期化すれば事態は深刻になることは間違いない。当事者はそろそろ動き出す時期にきているのではなからうか」

山元がいったように、舞台裏ではアメリカと秘密協議が行われていることは確かかなようだった。そうはいっても政府中枢が何を考えているか、小川の立場では、知る由もないことである。しかし、交渉の進展を期待するのは無理だろう、と小川には思えた。妥協案を提示できるような状態にはないからだ。小川は否定的に答えた。

「そうかね、ちょっと疑問だ。というのは、最初メキシコは対外債務の支払いを停止するとはつきりといっていたね。それが今週に入ってからのことだが、アルフォンマ蔵相の発言をみると、当分のあいだ凍結した対外債務うんぬんという具合に明確にいい方が変わってきている。それはメキシコの軟化とみるんだが、どうだろう」

「これは全面的な経済戦争だ。戦争には、前線での闘いもあれば、情報合戦や外交戦もありうるわけで、とくに外交戦では情報と虚々実々の駆け引きとが、この戦争での主たる手段になることはわかってもらえるだろう。そうした意味でいえば言葉の使い方がちょっと違ってきたことなど、それほど意味がないんじゃないの」

山元がいうように、メキシコの対米姿勢にわずかながら変化の兆がでていることは、小川にも感じ取れることだった。が、小川は肝心の情報を待っていない。小川は我ながら、いい加減なことをいつているとは思いながらも、言葉を続けた。「それよりは、今回、メキシコが提起した問題、その本質をどう理解するか、その方が重要だと思うが」

このあたりから話の調子が変わり、いつしか説明調のしゃべり方になっていた。いかにも大学教授らしい重おもしろい職業的な響きを持ったいい方である。小川のそうした気張ったもののいい方が、山元は少しおかしかった。

「九五年以降、強化されてきたアメリカのメキシコに対する信用の締めつけは現政権の政治的基盤を脅かし、経済と社会の混乱に拍車をかける結果となって現れ

たことは、現在のメキシコの現状をみれば明らかだと思う。当然なことだが、ここでメキシコは自衛手段に訴えざるを得ないぎりぎりの選択を迫られたわけだ」

「だからデフォルトという非常手段に訴えたということなんだろうが、そこで問題としなければならないのは、そこまでメキシコを追い詰めるアメリカの狙いは何であつたのかということではないかね」

「その通りだ。簡単にいってアメリカの狙いは、かつて親密な同盟関係にあつたメキシコに、そのナショナリスティックな政策が、いかに愚かなものであるかを悟らせ、メキシコをアメリカの利益に適応した政策に復帰させることにある、そうみるのが妥当だと思う」

「ところが実際の局面は、そのことがかえってメキシコのナショナリズムを燃え上がらせる結果となり、抜き差しならぬ対立と激しい憎悪をうんだ。そして世界を巻き込んだデフォルトという最悪の事態になった」

山元はそういつて、ちらつと時計をみた。ちょうど十時を指しているところだつた。カウンターの方は、相変わらず客で賑わっていた。キヨの弾んだ笑い声は座敷まで聞こえてきた。小川は山元の言葉に頷いてからいった。

「アメリカのやり方は、その国の国民の怨嗟えんさが燃え盛り、政府の転覆を望むようになるまで、継続されるのが普通だ。これは戦後アメリカの対外戦略の基本路線でもあると思う。今度の場合もそうだが、結局のところアメリカは、自国の政策を無条件で受け入れる新政権を誕生させること、そうした決意でメキシコに揺さぶりをかけてくるのではないか」

「別ない方をすれば、政府転覆さえも辞さないということだね」

「その通りだ。だから通邦情報局なんぞは、昨春秋に行われた地方選挙で選挙運営に不正があつたとして、野党の国民行動党やその背後でうごめいているマリオネス派を扇動、暴動を引き起こした」

「アメリカが左翼勢力を支持しているというのか。信じられないような話だ。そうでなくともだよ、中南米は左翼革命の嵐にみまわれているというのに、いくらなんでも……」

「常識的には君がいう通りなんだが、ともかくアメリカのアンジェトロ政権潰しは執念に近いもので、潰れるまでこうした暗躍が続けられるんじゃないか。妥協はないと思う」

そのとき、ふと山元の脳裏をかすめたのがソ連の対応だった。アメリカの影響力が弱まった地域、とくに革命騒動のさなかにあるような地域では、いくつかの友好国をソ連の手に奪われたという苦い経験をアメリカは持っている。徹底的にメキシコを追い詰めた場合の反動が出て来るのが当然である。メキシコがソ連に走る可能性だってある。そこらあたりのことを戦略的にどう判断しているのか。それはたぶん、アメリカにとってきわめて危険な力ケになるはずだ。児島も同じ意味のことをいつていたのを思いだした。

「アメリカにとって気がかりなことは、この混乱の間隙をつき、ソ連がちよつかりを出してくることだと思うんだがね。だからアメリカはアンジェトロ政権を打倒することに当面の戦略目標をおくとしても、同時に左傾的な政権が登場することも防止しなければならない。そうだとすればアメリカは二律背反した問題を抱え込むことになる」

「七〇年代までの国際的な政治構図からいえば、確かにその懸念をアメリカは持っただろう。今とは違った行動をとったと思う。ただ、状況は違ってきているからね。とくに八〇年代半ば以降、米ソ関係は大きな変化をみせているというのがわれわれの判断だ。むしろ両超大国は南北問題に直面した場合、連携してことにあたることすら考えられる」

「そうだろうか。たとえばデフォルトが宣言された直後に、アメリカはカリブ海に用心深く海軍部隊を展開させる一方、国境周辺には地上部隊を目立ためように配備した、それは対ソ牽制^{けんせい}というか、ソ連に対する示威的な軍事行動だったと思うんだが」

「ソ連が直接、間接にしるメキシコ問題に介入すること、それは考えられないことだ。たぶん、ソ連は圏外中立を守るんじゃないか。それどころか、この問題では米ソ共同行動をとる可能性すらある」

「大分確信に満ちたい方だが……」

「これも一般論だと怒られるかもしれないが、その理由は軍事や工業化に必要な高度先端技術が欲しいという経済的要因のほかに、ソ連には勢力圏下の内部に抱える南的要素からの脅威があるからだ。具体的にいえば、東欧諸国の離反が続ぎ、それに深刻な問題は、イスラム革命の脅威である。とくにイスラム革命の余波は中央アジアの諸共和国を侵食、今ではソ連の領土保全に対する直接的な脅威にさ

えなっているからだと思う」

小川は「だから」といつて続けた。

「国営タス通信がデフォルトのニュースを最初に伝えたときも、客観報道の形式を採っているとはいえ、どこか非難めいた論調が含まれていたとは思わなかったか。それにその後起こっている事態、つまり、先はどから議論しているメキシコ内部の政治状況に関しては、プラウダなどソ連のマスコミは完全に沈黙しているのも興味深いことだ」

そういつたときの小川の表情は暗かった。それもそのはずだ。その意図は別にしても、あれほどおせっかい焼きのソ連までも、アメリカに同調的であるとするならば、メキシコは完全に孤立した闘いに追い込まれていることになる。しかも、同盟者として頼みとする他の南側諸国も動く気配はなかった。

ただ、ソ連のメキシコに対するスタンスは本当に小川のいう通りなのか。山元にはいくつか疑問に思えた。中南米での米ソの確執はなお激しく続いている。再び、そのことを蒸し返したのはそのためだった。次に小川が口にしたことは、まったく意外だった。

「実をいうと、キューバが反体制派に武器を供与する話を秘かに進めていたんだが、これを阻止したのはだれだと思う。常識的な線で考えれば、アメリカということになるのだが、そうではなかった。まぎれもなくソ連だった。それはつまり、メキシコの反体制派はソ連にとって敵ではないにしても、少なくとも味方ではないということだった」

「うん……そういうことか」

山元は思わず唸った。ドミニカやニカラグアでは、あれほど干渉がましい行動に出ていたソ連が、変われば変わったものである。そしてアメリカが反体制派の支援にまわっているというのだ。これまでの国際関係の常識からいってとても考えられない事態だった。

われわれは米ソの対立の側面にあまりにもこだわりすぎていたということなのだろうか。結託の側面については、無関心にすぎたようである。大国のエゴイズムに翻弄される南の諸国家は、これではたまらない。山元は南北関係のありようを改めて考えさせられた。

それにしてもメキシコの政治情勢は日に日に悪化しているようだ。経済情勢が

悪化するなかで、失業の増大、悪性インフレーションの加速、不均衡に蓄積された富、社会的不平等、政治の民主化など民衆の不満が極限状況に達している。国家としての自壊作用にさらに拍車がかかっていることは間違いない。山元はこの事態をそう理解していた。

待てば熟柿が地に落ちるかのように、アンジエトロ政権は瓦解する。アメリカはそれを待っているのではないか。その意味でアメリカの戦略は成功した。だからメキシコがデフォルトを宣言しても、ただちに報復に出ることを控えているのではないか、山元にはそう思えた。

この分析はまんざらあてずっぱうなものではなさそうだ。山元にはそう確信することができた。最近になって、メキシコから伝えられるニュースはいずれも、アンジエトロ政権がいつまで持ちこたえることができるか、といった悲観的なものばかりだった。地方都市ではすでに、騒乱状態が巻きおこり、まるで革命前夜の騒ぎが起こっていた。

その日の新聞にも、メキシコ各界の著名人がアンジエトロ大統領の即時退陣を求める書簡を大統領自身におくったというニュースを伝えていた。もはや事態は、アンジエトロ政権の瓦解は時間の問題だ、と評論するものまであらわれているほどだった。

事態は想像している以上に急速な展開をみせている。問題は九月末に予定されているゼネストだ。山元は自分の気持ちを正直に言えば、メキシコの反体制派に對して同情的だった。彼らが掲げているのは精々のところが政治と経済の民主化にすぎない。

「小川君ね。対米関係もさることながら、メキシコが抱える本来の危機は実をいうと対内関係にあるんじゃないかね。アンジエトロ政権の腐敗ぶりはそれはたいへんなものだと思うよ。僕がメキシカンの立場だったら、たぶん、君とは違って反体制の立場にたつことになると思う」

小川は大きくかぶりを振った。額にはうっすら脂汗がにじんでいた。

「だからといって、マリオネス派がアンジエトロ政権よりはましだといえるだろうか。政権の腐敗は、この国の構造的な問題であって、それは極端な生産性の低さからくる貧困に原因があるんだ。明日が喰えないのでは、政治の民主化もへちまもあるものか」

小川は吐き捨てるようにいった。極貧の生活にあえぐ民衆が国民の九割以上を占める。土地は痩せ衰え、ろくな産業もない。働くにも働く場所がないのだ。彼らに仕事を与え、食と住を与えなければならぬ。民主化とやらを叫んでいる連中に、いったいそれができるとでもいうのか。

彼らは権力中枢からはずれてはいるか、やはり特権階級というべきだ。

小川は珍しく興奮していた。小川のメキシコに対する思い入れは想像以上のものだった。維新の志士たちのような気概がある。山元は小川の立場を考えると、彼の気持ちができるような気がした。

「だからこそ、天然ガス計画を軌道に乗せる必要があるんだ。それで、まず、外貨を稼ぐ、次は天然ガスを利用した工業化計画を進める。とくに開発の遅れているバハカリフォルニアにとっては、重要なプロジェクトになるはずだ。僕に与えられている任務といえば、政治的なこともさることながら、日本と協力してこのプロジェクトを立派に成功させることにつきる」

だからといって、小川の考えには率直には頷けなかった。アンジエトロ政権はたとえ、アメリカの干渉がなくとも、自然に瓦解することは間違いないのではないか。そのとき、小川の立場はどうなるのか。

「だれが政権を掌握したとしても別段、メキシコがこの世から消えてしまうわけでもなかるうに。それにだよ、君が考えているほど、アンジエトロ政権の基盤は軟弱ではない。たぶん、持ちこたえることになる。ナシヨナリズムは結局、この国に残された最後のコンセンサスだからね」

「ナシヨナリズムか……！」

山元はため息をつきながらいった。夢を追い続けることは、悪いことではない。振り返ってみてこの俺の夢とはなんであるのか、と考えていた。それにしても小川の焦燥は激しいようだった。

(つづく)

小説国際プラント・ビジネス戦争（十二）

杉田望

激論のすえに

関西商事の十六階会議室では、緊急メキシコ対策会議が開かれようとしているところだった。会議室はエグゼクティブ・コンファレンス・ルームと社内では呼ばれ、いつもだと、毎週一回、常務会が開かれるところである。真夏日の午後のきつい太陽が容赦なく薄いカーテンを突き抜け、部屋全体をオレンジ色に染め上げていた。

その日は、木内の葬儀が終わって、ちょうど三日目のことだった。木内の死に對してあれほど動揺し、感情を高ぶらせたというのに、今では深い疲れを覚えるだけで、これといった感慨すらわいてこない。自分は人間として、冷淡なのだろうか、と今田は自問した。

会議室全体が、木目調で統一されてあった。深ぶかと敷き詰められた渋いアイボリー色のじゅうたんの上に楕円形状の会議用テーブルがしつらえてある。そこには、関西商事の取締役全員が座れるだけの席が用意されていた。かなり広いスペースだ。それぞれの席には、部厚い木製のテーブルに深く埋め込む形で大型コンピュータに接続されたディスプレイがセットしてあった。会議室の正面右手には、ブリーフィング用の大型スクリーンが用意されていた。午後の陽を浴びまぶしく反射している。

緊急メキシコ対策会議は、その日の午前、山田新造社長が異例な形で召集したものであった。山田社長のほか、大園啓五副社長、財務本部長の河上芳男専務、鉄鋼本部長の玉垣忠雄常務、業務企画本部長の新井清隆常務などが主要な出席者だったが、このほか、取締役クラスで各本部の副本部長など



十五、六名が出席していた。機械部門からは総括役員の大園のほか、エネルギー機器本部の副本部長をつとめている鈴木取締役の姿もあった。鈴木副本部長はこの六月、株主総会で取締役に選任されたばかりだったが、社内では大園副社長の腹心のひとりとして知られていた。今日はいくらか緊張している顔つきである。

機械部門と鉄鋼部門、それに財務部門と企画部門の担当役員がほぼ全員出席しているのは、今日の議題の性格からいって当然ではある。出席者の構成メンバーからいえば、常務会に準じた会議といえた。それにしてもにぎにぎしく大袈裟なことである。会議を召集した山田社長が何を考えているか、多少、意図的なものを今田は感じた。

今田は円形テーブルに席を占める資格はない。テーブルはがらに空いていたが、今田は壁際に用意されてあった椅子に座った。すぐ隣には、鉄鋼本部の青木部長が座っていた。右隣に今田と並ぶ形で座っているのが、直属上司でエネルギー機器部の中嶋義男部長だ。

だれかが指示して、そうしたわけではない。出席者全員が中央に席を占める山田社長を囲む形で、社内序列通りの席順で座った。それが今田にはおかしいことに思えた。全員席についたのを見計らうと、山田社長はおもむろに切り出した。時刻はちょうど午後四時を少しまわっていた。

「今日、諸君にお集り頂いたのは、メキシコがご承知のような状態になっていることに鑑み、わが社としての対処方針といいますが、そういった問題を検討して頂くことが第一、第二は大園副社長が中心になって進めております、メキシコの天然ガス開発計画に関しまして、ここで諸君のご意見を伺っておくことが本日の議題になるうかと思えます。で、まず最初にですなあ、メキシコの現状がどうなっているのか、そのあたりのことを業務企画本部の方から報告を伺いたい」

山田社長はわざとらしい、ゆったりとしたしゃべり方をした。大園は腕組みをした姿勢で、渋い表情をつくっていた。大園とはまるで対照的な態度をとっているのが新井業務企画本部長だった。終始、正面から山田社長を仰ぎみるようなかつこうで、ごもつともですとばかりに、いちいち頷いていた。二人の対応はまことに対照的である。

「かしこまりました。それでは後藤部長の方から報告させることにします」

新井業務企画本部長は、後ろの席にいる後藤本部長付け部長を顎をしやくるよ

うにして促した。相手が違えば、これほど極端に態度を変えられるものか。今田は驚くというよりは、新井の豹変ぶりに改めて感心した。

後藤は業務企画本部の本部長付け部長で、世間でいわれるところのいわゆる窓際族のひとりだった。確か、入社年次では新井より五年ほど先輩にあたるはずだ。かつてメキシコに駐在していたことがあるので、スペイン語には堪能である。無能で、協調性に欠け、扱いにくい男というのが後藤に対する社内での風評だった。が、後藤の表情のどこかに、人生を投げ出した人間にみられる居直りに似たふてぶてしさがある。

「資料を用意してありますので、まず、それをご覧頂きたい」

スクリーンいっぱいには経済統計が映し出された。経済統計はメキシコの産業セクターごとの生産額を時系列で示したもので、これで見ると八三年まで順調に拡大を続けてきた鉱工業生産額は、九五年以降急速に落ち込みをみせている。

国民一人当りの生産額は八二年で二千七百ドルだった。それが八六年にはついに二千ドルを割り込んでいた。これに対して消費者物価指数は天井知らずの上昇を続け、深刻なインフレ状態にあることを示していた。

次にスライドで示されたのが、対外収支のパフォーマンスだった。貿易収支はひどい縮小を示していた。とくに輸出が八四年を境として、急激な落ち込みをみせ、八六年にはついに七十億ドルの水準まで後退している。これは激減といつてよかった。いうまでもなく、石油生産の後退と原油価格低迷が原因です、と後藤は静かにいった。

今度はスクリーン上には資本収支の動向が折線グラフを使って示された。先進諸国からの対メキシコ投資が、後退を続けているため、大きく落ち込んでいた。これに対して対外債務残高は八六年に一千億ドルを超えたが、それ以降、新規の借入は漸増に過ぎない。理由は簡単なことで、アメリカが対メキシコ金融規制を実施しているため、新規の借款受け入れが停止していることによるのです、と後藤はよどみのない調子でいった。

後藤の淡々とした背景説明が続いていた。後藤が用意したデータは、いずれもIMFなどから取り寄せた公式データがほとんどで、新味には欠けた。が、こうして改めて説明されてみると、メキシコ経済が想像以上に悪化していることが、明瞭に理解できる。山田社長はわざとらしく、ため息に近い声を上げ、後藤の話

に聞き入っていた。

経済関係に関する報告が一段落すると、今度はメキシコの対外関係や国内政治情勢などの現状分析に移った。デフォルトに至る経過はとくに詳細な説明が行われた。ただ、内容は新聞や雑誌に出ている情報をサマライズ（要約）した程度のもので、とくに感心できるような情報は含まれていなかった。

それはそれとして論旨は客観的でニュートラルだった。後藤の話でひとつだけ今田が意外性を感じて聞いたのは、アンジエト口政権は民族主義の旗を掲げている限り、そう簡単に潰れない、と断言したことだった。なぜ、そう判断するのか、後藤がその根拠の説明に入ろうとしたとき、

「ご苦労さんだった」

と、新井常務が後藤の言葉を遮り、話を中断させた。一瞬、戸惑いの表情をみせたが、定年を直前に控えた男なんぞの話に誰も興味を持つこともあるまい、そう感じとったのかどうか、惘然^{むぜん}として自分の席に戻った。

だいぶ前のことになる。誘われて一度だけだが、今田は後藤と酒を酌み交わしたことがある。今田はそのときのことを思い出した。あれは確か、新宿のある居酒屋だったと思う。最初ほとりとめもない世間話が続いた。だいぶ酔いが回りはしめたころだった。何かきっかけだったかはしかとは覚えてはいない。後藤は突如としてメキシコ高原の古代遺跡から発掘されたというコアトリクエの女神像のことを熱心に話し始めた。

「この女神像はだね……それは奇妙というか、そりやあ感動的なものだったよ。愛と憎悪、生と死、正義と邪悪、暗黒と光り、太陽と闇夜、つまり二元的に対立するあらゆる要素を同一神格のなかに見事に表現した傑作だ。アステカ文化が作り出した最高の芸術だよ、今田君。あれをみていると人間の存在なんていうものはひどく悲しいものだね」

後藤はアステカ文明は、人間的であると同時にきわめて非人間的でもあり、いかに魅惑的な文明であるかを話し始めた。最初、今田は後藤の唐突なメキシコ文明論に奇異なものを感じたが、後藤の話にいつしか引き込まれ、熱心に聞き入っていた。

アステカ族にとって太陽が絶対だった。彼らの太陽に対する熱烈な信仰と賛歌は暗黒の世界に対する底知れぬ恐怖と一対のものであった。だから暗黒の世界と

闘い続ける太陽に生身の人間を人身御供^{ひとみごくう}として捧げることによって、闇夜の恐怖から人間を救ってくれることを念じた。ピラミッドの頂上に引き立てられる生け贄^{にえ}が流す血と生身から引き出された心臓を太陽に捧げることで、平安が守れるものと信じた。

彼らはそれを躊躇なく実行した。儀式は残酷であったが、人身御供となる犠牲者を含めて、神官が司る祭事の進行に民衆は興奮し、歓喜した。ピラミッドの頂上に引き立てられる人身御供はなかなば陶酔した状態のなかで、神官によって悪霊を払い清められ、素裸のまま仰向けに台座の上に縛りつけられる。

たいていの場合、それはアステカ族との闘いに敗れた捕虜だった。生け贄はできるだけ勇敢な戦士が望ましい。やがて生け贄は神官の手で左胸が切り開かれ、まだ、鼓動を打っているというのに、犠牲者の胸から生きた心臓が取り出される。人身御供は数人のときもあるし、数十人にのぼる場合もある。気紛れな神官はときたま、来週の若い女性を要求することもあった。

血で真赤に染まったピラミッドの頂上からつぎつぎと犠牲者たちの遺体が投げ降ろされる。儀式が頂上に達したとき、神官たちは犠牲者たちの屍体を身にまとい、狂喜して踊った。犠牲者が勇敢な戦士であれば、屍体の肉を細かく切り刻みこれを喰らい、最後に残された頭と骨は儀式の犠牲者を捉えたアステカ族の戦士がこれをもらいうけた。頭蓋骨の数を競うことが、アステカ族の男たちにとっての誇りだった。

蛇の紋様を象った腰布を身にまとったコアトリクエの女神像。天と地、生と死、明と暗、善と悪、豊かさと貧困、彼らの創造神であるこの女神像に象徴されるアステカ文明の繁栄は、彼らが残した碑文が予言していたように、やがて終末のときを迎える。

火山の噴火、飢餓。メキシコ高原を襲った悪なる神の復讐は、たちまちのうちにアステカ族とその文明を崩壊させた。太陽神の勝利を信じたアステカ族の長老たちと神官たちは、どれほど多くの犠牲者を太陽神殿のピラミッドに捧げたことか。

犠牲者たちは、列をなしピラミッドの頂上に向かった。神殿の焰は赤あかと燃え盛り、神官たちはさらに多くの心臓を取り出しては、太陽に捧げた。犠牲者の肉片は不安と恐怖のなかで狂喜する民衆の頭上に雨あられのごとく、バラ撒かれ

た。太陽の神は大変欲深で、さらに多くの人身御供を要求した。それに応え、血の儀式はさらに残酷になる。もはや太陽の神殿は、巨大な食肉処理場になっただけだ。

終末は一刻一刻と近づいていた。予言者が終末の到来を告げたとき、彼らは先を争って、この血で染まった都市から逃げ出した。が、かんばつで水はなくなり、火山の噴火が彼らを襲った。飢餓と熔岩にのみこまれて、この都市の住民たちは死にたえた。

太陽神殿に通じる道を、いまでもインディオたちは「死者の道」と呼び恐れている。後藤が幾万かの犠牲者たちの亡霊が、列をなして太陽神殿に向かって歩いているのをこの目でみた、といったとき、今田は背筋に冷たいものが走ったのを覚えている。

「だが、今田くん、この話はスペイン人のインディオ虐殺に比べれば美学がある」なにが美学なのか深く詮索することをやめ、そのとき今田は率直に頷き同意したものだ。メキシコの風土の特徴、そのやさしさと激しさは、たぶん、アステカ文明とその流れを汲むマヤ文明に起源を求めることができるのではないかと、後藤はひとり呟くようにいった。

「それはインディオたちの生活のなかに時間を超えて脈々と息づき、スペインとの闘い、そしてメキシコ革命のなかに見事に生き続けたね。そう、メキシコ革命といえば、革命時代の伝説的な人物としてエミリアーノ・サパタが有名だが、僕はどちらかといえば、革命の過程では脇役的な存在ではあったが、ビリヤがとても魅力的な人物のように思えるね」

今田はメキシコの歴史にはさしたる知識もなかったが、たぶん、後藤のいう通りだと思った。ビリヤは山賊出身の革命家だった。志操の高さ、純粹さ、その情熱はだれよりも大きく燃え盛った。まるで太陽の焰そのものだった。彼を愛した農民たちはそういまでも信じている。

彼はばかりが大好きで、こよなく女を愛した。いったい幾人の女と結婚式を挙げたことになるのか。それはただの女好きということだけではなく、自らの感情に素直であるためである。革命戦争で転戦する行く先ざきで女たちを心底愛し、愛された。仲間の死、不幸には絶叫して悲しんだ。が、敵と裏切り者には寛容さはまるでない。すさまじい怨念を込めて報復した。

「ビリヤは楽天家であると同時に革命に対する使命感にもあふれていた。山賊であり革命家でもある、彼の心は常に二元的なものが葛藤していた。ムイ・オンブレ、彼は本物の男だったし、アステカ族の男たちの姿をみるような気がする。僕はビリヤがたまらなく好きだね」

後藤の話には脈絡というものがなかった。革命の話から今度は一転して、メキシコの女たちのことである。黒く大きな瞳、烏色の黒髪。女たちは赤と純白を好んで身につけていた。彼女らは謹み深く貞節で、それでいていかに情熱的であるかを話した。それは彼の体験を話しているようでもあった。若く敏感な青年期に体験した想い出が、走馬灯のごとく彼の頭のなかを駆け巡っているのであるうか。後藤がメキシコに駐在していたのは、昭和三十年代のなかごろであったというから、彼はまだ、二十代の青年期にあったはずだ。酔いにまかせた気ままなしゃべり方だった。再び革命とアステカ文明に話題は戻った。そして憎悪をもってスペインの侵略を語った。

侵略者たちはなんと残虐であったことが、鉄製の甲冑かっちゅうを身につけ、剣を振りかざすスペイン兵士。アステカの男たちは独立と自由のためにどれほど赤い鮮血を流したことか。太陽神殿に捧げられた人身御供など、比べようもない。強烈な憎悪が彼らを闘いにかりたてた。

血の代価をもって独立を獲得した。それでも太陽神の勝利はまだ決定的ではなかった。暗黒の闇夜に君臨する邪悪な神が彼らを支配していたのである。アステカ族の血統をひく、インディオたちに再び闘いをいどんだ。邪悪な神が手にしていたのは独裁体制と太土地所有だった。

ほんの数パーセントに過ぎぬ太地主たちが、ほとんどの土地を所有、この土地の先住民でありながら、征服者によって伝統的な文化、社会を破壊しつくされ、人間としてのすべての尊厳を剥奪されて奴隷として生きること強要されたインディオたちは、立ち上がった。楽天と困難、希望と挫折、情熱と死。が、コアトリクエの女神像はまだそこに立ちはだかっていた。

コアトリクエの女神はまだ鼓動を打つ、生きた人間の心臓を欲深くも、要求していた。人身御供が足りない。犠牲者たちは、恍惚とした表情で太陽神殿の死の儀式の階段を登ろうとしていた。革命の主力はペソン、つまり農業労働者だった。いうまでもなく、彼らはアステカとマヤの末裔だった。

山賊であり、革命家であったパンチョ・ビリヤが生きた時代は、まさに激しい革命の時代だった。革命の時代に生きたパンチョ・ビリヤこそが、まさしくムイ・オンプレだったと、後藤はいった。ビリヤのことについて話すときの後藤の表情は情熱的だった。

終始変わらぬテーマ、後藤の話に脈絡があるとすれば、メキシコをいろどる血と太陽と情念世界であろう。今田がニューヨークに駐在してまもないころ、休暇を利用してメキシコ旅行を思いついたのは、あのときの後藤の話がたぶんに影響していたように思える。

あのときの後藤は本当に生き生きとしていた。が、鼻の先までずれ落ちる老眼鏡を時おり指先で押し上げ、膝の上で書類を抱えている姿は、あのときの後藤ではない。ただの初老の男だった。別人のようである。

後藤が途中までいいかけた 民族主義の旗を掲げるならば…… が、心情として今田にはわかるような気がする。後藤の寂しげな肩をみたとき、もう一度メキシコのことについて、後藤と話してみたい、今田はそう思った。

「それでは次にですね、メキシコがデフォルトを宣言したことに伴う、国際金融にあたる影響と申しますか、そのあたりの問題を財務本部から報告をうけたいと思う」

例のわざとらしいゆったりとしたしゃべり方をする山田社長の声が聞こえてきたとき、今田は再び現実引き戻された。おおきく頷き、財務本部長の河上芳男専務が立ち上がった。

河上はロンドン支店に十年近く勤務し、この間、総合商社として、はじめて本格的な国際金融方式を切り開いた伝説的な人物だった。いまから十五年ほどまえは、海外のプロジェクトに対するファイナンスといえば、まだ、日本輸出入銀行の延払い融資など、制度金融が中心であった。が、既存の制度金融は海外の大型プロジェクトに柔軟に対応するには、あまりにも弾力性に欠けていた。そこで総合商社が信用を附補する形で、国際金融市場から直接資金を調達する方式が考え出された。

問題は保険制度との絡みだった。河上はロンドンにあって、新しい金融制度のスキームづくりに没頭した。シティの金融業界にくまなく足を運んだ。最初のプロジェクトは南アフリカで実現した。

いまでこそ、大型プロジェクト向けのサイドファイナンスやローカル・ポーション（現地費用）に対する商社金融は当り前のことになっているが、当時ではやはりこの方式は画期的なものであった。だから河上は、日本のなかでも有数の金融情報通であるとともに、金融実務にも精通していた。

「後藤部長、大変ごくろうさまでした。とくに最後の部分は興味深く拝聴させて頂きました」

河上は後藤に向かって丁寧に頭を下げ、そういつてから話をはじめた。河上はそうした礼儀をわきまえた男だった。後藤は多少、あわてた様子で、椅子から立ち上がり、小腰をかがめるようにして、頭を下げた。やはり河上専務も後藤が最後にいいかけた、あのことが気になっているようだった。それにしても折目正しい河上の態度は爽快で、気持ちのよいやりとりだと今田は改めて河上に好感を持った。

「メキシコの対外債務の現状に関しては、後藤部長の報告のなかにも詳細に触れられてありましたので、ここでは省略させて頂きます。まず、わが社のメキシコに対する債権は、証券投資、短期長期の直接融資などを含めまして、約百五十八億円にのびります。まあ、同業他社と比べますと、それほど大きな金額ではありません。ちなみに申しますと、佐藤忠商事の場合、総額で四百億円を下らないだろうと思います。銀行関係でいいますと、やはりダントツなのが千代田銀行です。三千億円の規模にのびります。ですから千代田銀行にとりましては、今回のことはまことに深刻な事態であろうか、と思われます」

邦人企業の対メキシコ債権の状況報告が一段落した段階で、河上は世界銀行やIMFなど国際金融機関の動き、アメリカをはじめ金融メジャーの動向などを紹介した。河上が紹介した数字だと、アメリカの対メキシコ債務は、さしたる金額ではない。異常に膨らんでいるのが、日本と西ドイツだった。なるほど、アメリカは今日を予想して逃げの手をあらかじめ準備していたのであろうと、今田は思った。

「河上専務、アメリカの動きと申しましょうか、それに先進各国のこの事態に対する対応、今後、どういう方針で事態を乗り切るつもりでいるか、そこらあたりのことをお話し頂ければと思うのですが」

河上の話がひと区切りついたところで、新井が例の追従笑いを口許に浮かべな

からそう聞いた。デフォルト宣言から今日で二週間近くたっているのだが、各国の反応は鈍い。

新聞をみている限りでは大きな動きはみられなかった。ニューヨークで今野もいつていたが、たぶん、それはメキシコの政治状況が激しく流動していることと関係があるのかもしれない。ただ、新井の質問の含みには、この際、メキシコ関係ではできるだけ、悪い材料を引き出しておきたい、そうした意図が露骨に出ているようにみえた。それは今日、緊急会議を突如として開いた、山田社長の意図であるようにも思えた。山田は二人のやりとりを黙って聞いていた。

「そうですね。第一の問題は、これが債務各国に連鎖反応を引き起こすのではないかと懸念されたこと。すでに皆さんもご承知かと思いますが、幸い最悪の事態は回避されたようです。第二の問題、新井常務からご質問を頂いた問題ですが、最大の懸念であった金融恐慌という事態はいまのところ起こっていませんし、金融市場は比較的安定しています。また、先進各国もうまくこの事態を乗り切るために、米国を中心として各国は協調関係を深めているようです」

河上は新井の質問の意図をちよつとずらした形で答えた。そのことより、河上は本来ならば、メキシコのデフォルトが金融恐慌を引き起こすことになってもおかしくなかったはずだったのが、なぜそうならなかったのか、そのことについて話し始めた。

「デフォルトが宣言されたその翌日のことでしたが、米国の財務長官の呼びかけで、日本を含む先進各国の蔵相がワシントンに集り、緊急先進国蔵相会議を開いたことは、ご承知かと思えます。ここで何を議論し、何を決定したのか。メキシコに対する強硬な非難声明を発表したことを別にしますと、その内容はほとんど伝えられています。まず、彼らが第一に決定したことは、各国の公的債務、世界銀行など公的債務をとりあえず凍結の措置をとる一方で、民間の債務に関しては、IMFが肩代りすることを決めた。つまり、民間債務を公的な国際債務にシフトさせることで、さしあたっての金融危機を回避したのです」

なるほど、と今田は思った。初めて聞く話だ。ニューヨークでも今野はそのことには触れていなかった。今野にしても情報を掴んでいなかったのだろうか。たぶん、河上専務は、ロンドンあたりの金融情報筋から聞き込んだのではないか。

この方式をとれば、貸先が変わった点を除き、帳簿上の勘定、民間金融機関の帳尻は確かにあう。当座を凌ぐ^しには、確かにひとつのアイデアであることは間違いない。しかし、よく考えてみれば、この程度の対応措置では、すぐにでも破綻をきたすことは明白だった。そう質問したのは、山田社長自身だった。

「問題の第一は、長期間にわたりIMFが、二千億ドルを超える巨額な債権を引き受けられるだけの財力があるかどうか。第二の問題は、国際決済銀行にしても、IMFにしても結局のところ寄合い所帯にすぎない。その債務に誰が最終責任を負うのか、問題は未解決で残されることになる」

「お説の通りだと思います。この問題は、各国のIMFに対する資本抛出問題とも微妙に絡み、それに新たな資金的負担を要求される可能性があるだけに各国の対応は慎重です。とくにフランスの場合、対メキシコ債権が割り合い小額だったこともありまして、国際機関がどうして犠牲をはらう必要があるのかと、疑問を投げかけています。対メキシコ債権が大きべ、その上、貿易で大幅黒字を抱えている日本に対しては、自然風当たりが強くなっているようです。ただ、日本の大蔵省当局はのりくらりと逃げ、直接的なコミットは避けています」

河上が報告したことを要約すれば、一応、先進各国は緊急措置として、金融恐慌を回避するため、民間債権をIMFに肩代りをさせるところまで、合意ができた。それによって、さしあたって金融恐慌という最悪の事態だけは回避できた。

ただ、長期的な対応措置に関しては、各国の利害が錯綜して、なかなか議論がまとまらないというのが実態だ、ということになる。だとすれば、今後、メキシコがどのような手を打ってくるかにもよるが、アメリカが積極的に事態解決に動き出すかどうか、それが焦点となるはずだ。今田にはそのことに興味があった。このことは、今野と議論したときも問題になったことを今田は思いだした。

「そうするとですね、河上専務……メキシコは国際経済社会から完全に見捨てられた、そう判断してもおかしくはない状態にある。だから現状では、メキシコとの商売は慎重にならなければならない、それがここでの結論ということになりましょうか」

新井はまたもしたり顔でいった。それは駄目押しのいい方でもあった。テーブルの正面右側に坐る大園副社長は、相変わらず沈黙を守ったまま、パイプを吹かしていた。

「いや、そうではないと思いますね、新井常務。国際金融界というものは、そんな単純なものではなく、奥の深いものです。ですから性急に結論を出すことは危険だと思います。とくに米墨関係についていいますと、どちらかといえば対立の側面だけが強調されがちですが、舞台裏では虚々実々の駆け引きが行われているのが実態でして、水面下での交渉がどうなっているのか、実をいいますと我われとしても把握できない、そういう状態にあります。具体的なプロジェクトにどのようなとりくんでいくか、これは別問題でしょうが、一般論からいいますれば、そういうことだと考えて頂きたい」

新井はちょっと不満そうな表情を浮かべたが、河上のいったことは正論には違いない。それに、対立する山田派と大園派との狭間にあつて、中立的な立場を守っている河上を敵にまわすことも馬鹿げたことだ、新井はそう判断したのだろうか。口許に再び笑みを取り戻し、それは河上専務のいわれる通りだ、と、あつさりとの議論から降りた。河上は、その言葉に無表情で頷いただけだった。「いやあ、河上専務、ありがとう。よく状況がわかった。それでは次に鉄鋼本部と機械本部から稟議りんぎが上がっておるメキシコ天然ガス計画の推進に関して、ここでひとつ遠慮のない検討を願いたい。まず、最初に経過をですね、玉垣常務の方から報告を受けたい」

ひと呼吸をおいてから山田社長は、そういった。玉垣常務は、日管製鉄を通じて、商談が入ってきたことや、すでにパテック社との間で初歩的な打ち合わせが行われていることなど、これまでの経過を簡単に報告した。そして商談の規模は、現在までの見積み結果だと、十二億ドルは超え、パテック社側から要請されている、資金協力問題にどう対応するか、まだ、結論を出していない、とつけ加えた。「そうするとなんですか。具体的に交渉がすでに始まっている、そういうことです。これだけ大きなプロジェクトですから当然、常務会の承認はすでにとりつけている、そう理解してよろしいんですな」

詰問調でそう聞いたのは、業務企画本部で中南米を担当している桑原取締役だった。桑原が取締役に就任して、二期目になる。上司の新井が来期、専務に昇格するとの噂だから、桑原はたぶん、その後を襲って、常務に昇格するのではないか、というのが社内でのもっぱらの評判だった。だから桑原は平の取締役とはいっても、すでに常務になったような気分である。それに社内遊泳術にたけていた。

さすがに玉垣は、むっとした表情を浮かべた。どう切り返すべきか構えた態度をとった。玉垣も河上と同様に、派閥抗争の圏外にある人物だったが、温厚で実直な人柄だった。だから怒った顔をひと前でみせるようなことは、めったになかった。

「だから今日、ここでその対応を議論することになっているんじゃないのかね、桑原君。会議案内にもそう書いてあるし、それに我われとしては、機械本部と協議の上、稟議書も社長の方に上げてある。それに間違いありません、社長」

玉垣は桑原の手続き論に対して、手続き論で答えたのである。山田はちよっと困ったような顔をした。玉垣がいうように確かに、稟議書は上がっていた。それに目を通したからこそ、今日、緊急メキシコ対策会議を召集したのだ。桑原のいい方にはすぎがあった。それを見事に突かれた形だ。それに実直ものの玉垣では、いかにも相手が悪い。

ただ、正直いえば、山田にとってメキシコの問題なんぞは、どうでもいいことだった。大園がなにかまた、画策をしているらしい。自分が社長を務めているあいだは、大園に勝手はさせない。それを皆の前ではっきりさせる、それが今日、緊急メキシコ対策会議を開いた本当の理由だ。しかし、山田は沈黙した。

「桑原君、それはいいすぎのようだね。玉垣常務がいったように、手続き上では問題はない。ただ、ここで議論をしておかなければならないことは、先ほどの報告にもあったようにメキシコが未曾有の混乱した状況にあるわけでして、このプロジェクトにとりくむ場合、そこらあたりのことを充分配慮する必要がある。ですからしつかりした議論をした上でないと、わが社としての方針が決められない。そういうことなのではないかと思うのです」

そう切り返したのは、新井だった。新井はまず、身内を叱ることで一步譲り、改めてメキシコに対する関わりかたを問題にしたのだった。が、それにしても桑原は社長と新井に対する忠誠心を発揮したつもりだったのだが、新井の一言ですっかりしよげ返っていた。

新井の後ろの席に坐る後藤は、ぼんやりと窓の外をみていた。また、後藤はコアトリクエの女神像のことでも考えているのだろうか、と今田は思った。寂しそうな横顔だった。雲の上の人たちの争いごとには、まったく無関心のようなのである。西陽が沈みかけていた。真赤に浮き雲を染めあげていた。沈みかけた太陽に照ら

し出され、高層ビルの群が輝いていた。

「そういうことでありますので、ひとつメキシコ向けの案件は、できるだけ慎重にやってほしい。別段、ここで議論しておくことがなければ、ここらあたりでそろそろ……」

山田がそういいかけたとき、河上がすつくと立ち上がり、

「社長、まだ天然ガス計画がどういうものであるか、全然、話を伺っていません。メキシコがどのような計画を検討しているのか、デフォルトがどういう形で決着するのかを見通す上でも、たいへん興味深いことなので、ぜひ、ここで計画の概要だけでも紹介して頂けないものでしょうか」

といった。慎重論でまとめて、

大園が考えている天然ガス計画を潰すことができると思っていた山田社長の腹づもりでは、新井の発言をとおに会議を終わりにしたかった。河上の発言は予想もしていないことで困惑した。

「河上専務、それはあなたの先はどの話でも……」

そう新井がいいかけたとき、今度は太回が立ち上がった。

「社長、そうさせて頂きます」

山田は大園がなにをいいたすか心配だった。が、考えてみれば、河上はただ話を聞きたいといっているのにすぎない。計画の推進に賛成しているわけでもなさそうだ。それならば、大園の発言をその枠のなかで、許せばよいわけだ。それに議事進行という役割もある。あまり目立った自己主張は許されない立場だ。山田は鷹揚に頷いた。

「せっかくの機会だから、そうしてくれないか」

「玉垣常務が経過については報告していますので、そのあたりのことは省略させてもらいます。ガス田はカリフォルニア半島の沖合約百キロの地点にございまして、概査で申しますと埋蔵量は十五兆立方フィートと推計されております。埋蔵



規模から申しますと、これは世界第一級の天然ガス田ということになります」

大園は手にした書類に時おり、目を通しながらよどみなく、説明を続けた。出席しただれもが、ほほうと唸った。さらに大園は、計画の優先順位がまず、パイプラインの敷設計画を早急に実現すること、第二は輸出を目的としたガソリン用メタノール工場を建設すること、第三が東部地域開発の中核プロジェクトとして、天然ガスを原料とした石油化学コンビナートを建設するほか、この地域のエネルギーを確保するため、火力発電計画をメキシコ当局が構想していることなどを、要領よく報告した。大園が手にしている書類は、確か木内が作成したものに違いない。あの報告書をつくったのが、木内のこの商事会社での最後の仕事になったのだろうか。木内の死が現実ではないように、今田には思えた。

「これは国内の動きになりますが、天然ガス計画と関連したメタノール計画ではニックがエフエス（企業化調査）作業に着手していると聞いているほか、西ドイツのボルギ社がオーナーズ・コンサルタントに指名されている。また、これは米墨関係を考えれば、まことに不思議なことなのですが、米国のコール・リソーシズ社がメタノール合成プロセスの技術を提供するとも聞いている。本件のメキシコ側の窓口でありますパテック社は、とりあえずわが社に対して、パイプライン敷設工事^{ふせつ}に限定して、まず見積りの提出を求めてきているのと合わせまして、ファイナンスの提供が可能かどうかを打診してきている、それがこれまでの交渉の経過であります」

大園の報告は実に整然としたものであった。

「なるほど、そういうことでしたか。メキシコがなぜ、あのような突飛な行動に走ったのか、これでわかりました。天然ガスの埋蔵量が十五兆を超えるというのであれば、それは充分、担保力を持つということになるわけですね。その話が事実であれば、国際金融界もメキシコに対する評価を変え、資金を提供する動きが出てくる可能性もありますなあ」

そういったのは、河上だった。そして、河上はなにかさかんに電卓で計算をしているようだった。そして、時どき、首をひねっては考え込んでいるようだった。

そこで発言を求めたのが、桑原だった。

「ちよつと待って下さい。これはメキシコ支店からの報告ですが、いま副社長がいわれたような天然ガスに関する噂があることは事実のようですが、まだ埋蔵量

は最終的に確認されてはいないですね。それから先はどの話にもありましたが、メキシコの社会情勢が極めて不安定であり、とてもまともにとりくめる相手ではない、そう判断するのですが。間違っていましたか」

言葉の選び方は、今度は慎重だった。これで挽回ができたと思ったかどうかはわからない。やや緊張したしゃべり方ではあったが、桑原は話し終わったところで満足そうにひとり頷いた。が、客観的にみてとても相手を説得できるような理屈ではない。わかつているのかなあ、と今田は思った。

桑原がここで立てた理屈からいえば、だからといってこのプロジェクトをやめるべきだということにはならないはずだ。精々のところが、慎重に対処すべきだ、ぐらいのところが妥当な結論になるのではないか、と今田は思った。根まわしには、抜群の才能を発揮すると評判の高い桑原だが、議論には弱いようだった。やはり社長の山田も同じ思いのようで、ひどく渋い顔をして、桑原の話を聞いていた。大園は桑原の発言を完全に無視して、話を続けた。

「私がメキシコのガスプロジェクトを重要な案件である、そう判断しました根拠をここで申し上げておきたい。第一はエネルギー情勢との関連です。このあたりのことに関しては、エネルギー機器部の今田課長が詳しいものですから今田君に説明させたいと思います」

今田にとっては突然の指名だった。打ち合わせのまったく突然の指名にちよつとびっくりした。そのとき、後藤が今田の方をみながらわずかに頷いたように思えた。存分に考えていることを話せ、そういう励みだと今田は理解した。「ご承知のように、現在、原油価格は安値安定で推移しておりますが、昨年以降原油価格の趨勢をみますと、わずかずつではありますが、上昇を続けております。この原因であります、どうも世間でいわれているような在庫調整など、そうしたことが原因ではないようでした、ずばり申し上げれば、中東情勢に対する不安といえますか、そういう心理が働いたことが、原因になっているものと考えられます」

「不安要因とかいったが、それはどういうことなのかね」

今度もまた、桑原だった。今田のことを、大園派だとも思っているのか、どこか言葉に刺がある。どうでもよいことだったが、今田は腹立ちを覚えた。派閥抗争なんか、勝手にやれという気分だった。だからこの際、大胆な仮説を展開す

る腹を決めた。

「テロリズムが横行する、これが最大の要因です。ホメイニ師の死は、あの熱狂的なイスラム宗教革命を鎮静させるどころか、逆に煽りたてる結果になっていることも、その証拠のひとつです。つまり、ホメイニ師が死んでしまったことで、まったく統制を失ったイスラム革命運動は、分裂を繰り返しながら、より過激化していくことになった。彼らの行動原理の終局はテロによって目的を達成する以外にない、そういう極限の状態にあります」

「それはひとつの考えだね。僕もそんな気がするんだ」

河上専務は感心したようにいった。相変わらず熱心に計算を続けていた。

「問題は、テロ行為が単にこれまでの作戦を拡大、過激化するだけではなく質的な転換を図っていることに注目したい。つまり、彼らはイランという国家の一部をかすめとり、さらに各国に分散する彼らの仲間と連携しながら、全面戦争を意図していることです。結論を申し上げれば、イスラムの純粹原理からいって敵対するすべてのものが、攻撃の目標になるわけでして、これは全世界に対し宣戦布告をしているようなものです。石油に依存する近代産業、それは彼らにとってとても忌避すべき悪の根元と映るのですが、その近代産業を支える石油がすぐそばで、生産され、それが全世界に供給されている、それが攻撃の目標にならないはずがない。まだ、確たる証拠は持っておりませんが、場合によってはサウジアラビアの油田に対し、核攻撃を準備中であるという噂もあります」

今田はさらに話を進めた。その結果、世界はどうなるか、とくに日本のように原油の六割以上を中東原油に依存している国家にとっては、想像以上に悲惨な状態になる。そこで今田は、一旦言葉を休めた。そういう終わったとき、同じ意味のことを、ケネディ空港で一緒になったカール・ルビンズがいていたことを、なぜか今田は思い出した。

「話にならんね。たわごとだよ、それは」

桑原が吐き出すようにいった。予想通りの反応だ、と今田は思った。太陽はすっかり沈んでしまった。茜色に染まった西の空かわずかに夕日の名残をとどめているのみで、闇夜の世界が迫っていた。黒ずんだ高層ビルが夕闇のなかに揺らぎ、それぞれの窓から一斉に人工的な光を放っていた。人間とはなんと欲張りなことなのか。太陽の光だけでは足りなくて、人工的な光までをつくり出した。夕闇に

包まれた高層ビルの群は、あのメキシコ高原に廃墟として残骸をさらす太陽神殿に似ているように今田には思えた。

「たわごとだとは、何ごとだ。きさま、何様のつもりか」

大園は突然声を荒げた。場は白け返った。大園は本気で怒っているようだった。河上は計算を終えたらしい。白けた空気を破って、河上が発言を求めた。

「玉垣さん、パイプラインだけに限定すると、確か必要資金は十二億ドル前後とかいつていたね」

「概算でそんなところでしょう」

「このプロジェクトはいけそうだ、社長、そう思いませんか。エネルギー情勢はいま今田課長がいった通りでして、そうだとすればこの案件はいまが買いどきだと思います。それにメキシコがデフォルトを宣言してるとはいつても、正確に言えば無差別に支払いを拒否しているわけではない。条件が折り合えばそのルールで商売をするのだといっているのだから、詰めた条件交渉をやってみたらどうでしょう。これは専務取締役として正式に提案するものなので、ひとつ社長、ぜひともこの件の検討をお願いしたい」

「そうはいつでも河上専務。メキシコはファイナンスの付与を求めてきているのだよ。いったいどうやって資金を調達するといえるのかね。しかも相手はデフォルトを平気で宣言する国だ。うちの主力銀行だって、まず動かんだろうし、これでは話にならない」

「現在、メキシコの対外債務は一千百九十億ドル。天然ガスの埋蔵規模からいって、これは五年で完済できる金額です。そうだとすれば、金利が少し高くはなるがユーロ市場から借り入れても充分採算があうプロジェクトだと思う。それなのに簡単に捨ててしまっていていいんですかね」

山田社長は自分の地位の保全には汲々としているが、メキシコの問題なんぞ元もどつてもよいと思っている。ただ、我慢がならないのが大園の存在だった。社長である自分を無視して、勝手に動きまわる。ここらあたりで、大園との関係をはつきりさせたいと考えていた。

考えてみれば、山田が社長に就任できたのは、たまたまの偶然であつたといつてよかつた。十五年ほど前のことになるが、例の航空機疑獄事件で、関西商事は当時の社長を含め、取締役の三分の一もの幹部が引責辞任した。突然の大量引責

辞任で社内に政治的空白が生まれた。当時、山田は総務部門の平取にすぎなかったが、こういうときに手腕を発揮するのが、世の常として管理畑出身の人間ということになる。山田は適任だった。

事件の再発防止が錦の御旗だった。組織の見直し、機構改革、人事の再配置などが強引に進められた。その先頭に立ったのが、事件直後、常務に就任したばかりの山田だった。

社内をわが物顔でのし歩いていた旧社長派に対する社内での風当たりが強かっただけに、山田が進めた社内改革は、最初は好感を持って受けとられた。経営者としてみた場合、さしたる手腕を持ち合わせている人物ではなかったが、社内が混乱をしている状況のもとで、巧みに泳ぎまわった結果、とんとん拍子で出世を重ね、念願の代表取締役社長に就任した。

ただ、山田が気になることは大園の存在だった。それに大園が、関西商事を創設した三島家と遠い縁戚関係にあることも山田の劣等感を刺激した。大園は米国関西商事の取締役を永く務めていたが、帰国後、めきめき頭角を現し、社内の信用を勝ち取っていった。強引で、社内の人間関係に配慮を欠くところはあったが、まずアイデアマンであり、そのアイデアを実現させる能力と手腕を備えていた。自然と大園のまわりに人間が集った。

それを山田は派閥の形成とみた。それは妄想にすぎなかったのだが、山田は對抗してかつての部下で自分のまわりを固めた。いま、ここには出席していないが、副社長で関西本社代表の水上、ちょっと頼りはないが業務企画本部長の新井など、いずれも管理畑出身者だった。こうなると、泥沼である。結局、山田は大園が提案するほとんどの案件に慎重論を唱え、その案件を潰すことに執念を燃やした。今度のメキシコの場合も、簡単にいえばそういうことだった。

さて、河上の提案をどう捌け^{さば}ばよいか。山田は考えあぐねた。こういう場合、水上がいれば、うまく処理してくれるのだが、どうも新井や桑原ではほとんどあてにはならない。動機がひとにいえるような代物でないだけに、河上の提案にどう対応すべきか迷った。

「ともかく今の情勢では、ちょっとコミットするにはリスクが大きすぎるんじゃないのかね。事態が落ち着くまで待つて、結論を出しても遅くはない、そうしたらどうだろう」

「その通りだと思います。で、次回に突っ込んだ議論をしてから……」

「あなたは発言を控えなさい」

そういったのは玉垣常務だった。敗者復活を狙った桑原の発言だったが、大園に怒声を浴びせられた上に、今度は玉垣にまで叱責をくらった。社長も新井も救いの手を伸ばしてくれそうにはない。桑原の黒ずんだ顔に脂汗がにじんできた。小柄な体がわなわなふるえているようにも、はたからはみえた。常務の椅子が遠のいてしまった、そんなことでも考えているのであろうか。そう思うと今田は桑原が憐れ^{あわ}だった。

青木部長や中嶋部長、それに他の会議出席者は、事態が意外な進展をみせていることに驚きの表情をみせながらも、部外者の立場として、雲上人たちのやりとりを興味深く見守っていた。時刻はすでに十一時近くになっていた。山田社長は、粘り腰をみせ、簡単には折れなかった。激しい議論は、なお、深夜まで続きそうな気配だった。後藤は相変わらず、窓の外をみつめていた。

(つづく)